

懐かしい延岡三ツ瀬教会

今年のペンテコステ(5月15日)は特別に嬉しい日となりました。それは1971年から8年間、夫が牧師として働いた延岡三ツ瀬教会が創立80周年を迎え、記念礼拝の説教に招かれたからです。

赴任する日に、杵築教会の、今は亡き吉新牧師が、大分と宮崎の県境の宗太郎峠を越えて、車で連れて行ってくださいました。ご高齢の長老が礼装の姿で現れ、丁重に歓迎して下り、恐縮したのは45年も前のこととなります。夫は30歳になったばかりでした。



教会は長老派の黒川牧師によって設立されました。堅固な信仰と清貧に甘んじ、無私な人格者黒川牧師の人柄は、多くの人々に感化を与え、教会は戦後の焼け跡から、現存の会堂を建築されたのです。黒川牧師が隠退された後、神学校を卒業したばかりの若い牧師が次々と赴任しては、黒川牧師との実力の差を思い知らされました。4代目になった夫も同様でした。

着任当初は、礼拝出席者数が十数名。教会員は主婦、経営者、教員、国鉄職員、大企業の会社員など、堅い職業の方々でした。思いがけず盲人が多くおられ、鍼灸師、浄瑠璃の師匠という仕事をしておられました。私は「障害者」と言われる方々に初めて身近に接することになりました。この方々が忠実な信徒で、多くのことを教えて下さったのです。生まれつきの盲人に対し、イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」(ヨハネ9:3)と語られた言葉を信じ、自分自身の障害を「神の御用のため」と信じる信仰を持っておられました。そして、目には見えない神が、見ておられ、障害のある自分を支えておられるという信仰でした。ある方は、目が見えたら、たとえ蛙になってもいいと言われたほど困難な日々でしたが、現実を受容し、この困難の中を神の力によって生きていくことに賭けて生きておられました。私の荒れた心や気持ちを、声を聞くだけで察し、私の顔に触って、優しくマッサージして、慰めて下さったことを忘れることができません。

また、脳機能障害、精神疾患に苦しむ若い方々もおられました。彼らはひたすら慰めと力をイエス様に求めていました。素朴で純真な信仰でした。そのうちの一人のご両親が教会に関わり、一緒に教会生活を始めることによって、教会の交流の輪が広がっていきました。私たちと同じ世代でしたから、仲間が仲間を呼び、自分の生き方をさらしながら、一緒に聖書を読むという交わりが生まれました。楽しみつつ聖書を読み、神様を求める仲間が共にいるということはなんと幸いなことでしょう。教会はこの時期にかなりの礼拝出席者が与えられました。苦悩を抱える人々が集う教会でしたから、牧師も私も彼らの忍耐に支えられ、また、教えられました。悲しむ者、重荷を負う者、疲れている者は私のもとに来なさいというイエス様のみ言葉がそのまま生きた言葉として、聞こえてくるような、温かい交わりがありました。

それから歳月が流れ、他の二つの教会で働き、老人となり、隠退しましたが、三ツ瀬教会で過ごした8年間が私たち夫婦にとって、宝石、規範のような、かけがえのない時として、今も感謝と共に感じられるのです。このたび、三ツ瀬教会の長い歴史を覚え、感謝して、共に礼拝をすることができました。三ツ瀬教会の上に主の祝福をいつもお祈りしています。